http://decfamily.p1.bindsite.jp/2017/

We 25R

No.254　17/07/19

進路について考える

「大学で学ぶとは」の話は参考になっただろうか。

秋以降に迫った進路選択に関して昨日の話を振り返ってみると、例えば大学・学部を選ぶ際、どの学部を選ぶかくらいまでなら本などで決めることができるが、同じ工学部であってもそれぞれの大学によって専門的に扱っている分野が違ったりするから、先ずはネットで詳しく調べてみたり、それでも分からない部分については、実際にオープンキャンパスに行ったり、学園祭に出かけたりする必要があるとのことだった。４年間（院まで含めれば６年間）をともに学ぶ仲間の「質」を確かめる上でも、実際にその場に行ってみることは大切だという指摘もその通りだと思う。また、その大学・学部の在学生や卒業生が身近にいれば、その人の話を聞いてみるというのも一つの方法である。医学部などは、臨床に強い大学と研究に強い大学があるし、さらに将来勤務医として実際に働くなら、その大学がどのような系列に属しているのかといったことが、勤務先に影響してくることもある。単に進学先を選ぶだけでなく、自分の将来像をある程度見据えて、その上でできるだけ多くの情報を集めることは大切だろう。

文系・理系を考える段階でも、自分はこの科目が不得意だから…といった消極的な理由で選ぶのではなく、「これをやってみたい」という思いが基本にあるということが再確認できたのではないだろうか。「やりたいことは理系だが、数学が不得意だから文系に…」などと考える必要はなく、むしろ「やりたいことは理系」という気持ちを大切にして、そこから数学の勉強に対するモチベーションを高めるべきだという話は説得力がある。

文系から理系に、あるいは逆に理系から文系に代わった人の話も出た。例えば、O野先生は、工学部に入ったが、３年次に法学部に移った学生の話をしていた。その後、その学生は法律事務所に勤めることになったが、元理系だからこその知識が、さまざまな法律関係業務の中で多いに生かされているとのことだった（工学系の特許申請など）。大学には編入という制度もあるし、もし自分の選んだ方向が違うと思ったら、現在の長い人生である、いくらでも方向転回は可能だということも知っておくとイイだろう（もちろん、それなりにお金が必要になるが…）。

迷っている時は、自分の頭の中であ～でもない、こ～でもないと堂々巡りを繰り返していても仕方ないので、頭ではなく身体を使って色々行動してみることが大切だという指摘も参考にしてほしい。行動することで未知の人や世界と出会い、それがきっかけとなって新しい展望が開けてくることがあるかもしれない。夏休みの時間は、そういうことのためにも活用しよう。

＊

さて、勉強した時間を塗りつぶす表を配るので、活用してみてほしい。丁寧にやる必要はない。とりあえず、自分の今年の夏休みを「数字」で把握するきっかけにしてほしいのである。来年の夏は来年しかない。その一回の夏休みを失敗なく有効に活用できるようにするためにも、その下準備をしてみようということだ。やるとやらないとでは、来年、夏休みの計画を立てる時に大きな違いとなる。